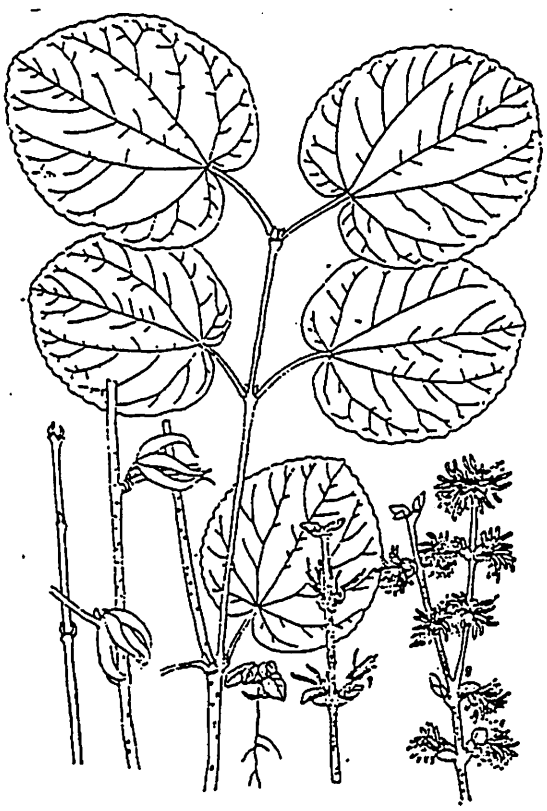
菅名岳北沢のカツラ林を見に行って

佐々木　博　昭

林道の終点から渓流づたいの道を、途中何度か石づたいに沢飛びしたり丸木橋を渡ったりしながら歩くと20分ほどで目指すカツラ林についた。流れは伐採跡やスギの植林地の中を流れていたときとかわって、まるで日本庭園を思わせるような美しい石組とシダのグランドカバーを伴った生々とした景観となった。左岸の斜面には小さな滝も見られた。その流れの両岸にカツラは点々と立っていた。カツラは“巨木なる者カツラに較ぶるものなし”と北海道誌（明治7年）にも記されているように日本で最も大きくなる樹木の一つであるが、大きくなるためには新鮮な、しかも氾濫したりせず適度の水量を維持している流水に恵まれている場所でないとなかなか生育できないものである。北沢では上流のブナ林がこのような清流をはぐくみ、カツラに最適な環境を作り出してくれたのだろう。



カツラの枝葉、花枝、果枝及び実生苗
－樹木大図説・上源敬二－

これまでに栗駒山地や八甲田山、北海道の山奥などの渓流でかなりの巨木に出会ったことがある。これらに比べて菅名岳のカツラはほとんどが株立ち状であるためか巨木という感じはあまりなかったが、初めて見る50本もの群落には屋久島でスギの老木を見た時のような荘厳な印象を受けた。株立状の樹幹は地上10メートルほどの所から太枝状に八方に広がり沢の上を大きな樹冠で閉ざしていた。低木類のほとんど無い開放的な林内である。下層にはやや日陰の湿地を好むシダ類やウワバミソウ、ミヤマイラクサなどの草本類がびっしりと生育し典型的な谷あいの湿性林の景観を見せてくれた。ほかの高木では大きなオヒョウが目についた。目通り周囲2～3メ～トルの巨木が点在する亜高山帯のダケカンバ林やブナ林のような迫力には欠けるが、女性的なカツラのイメージにふさわしく優しい印象を受ける林であった。うっすらと霧が立ち込めるような日には幻想的な原始の時を感じさせてくれるであろう。今回はイワヤシダやイワオモダカなどの珍しい植物をゆっくり観察する時間がなかったが、黄葉の時期にでももう一度ゆっくり訪れて見たい森である。

近年各地でブナ林を守る運動が盛んで、いわばブナブームであるが、ブナのみならずそのほかの樹林にも目を向けて行きたいものである。そのためにも、ぜひこの人里近くのカツラ林－新潟県では他に例をみないすばらしい樹林－を、水源であるブナ林とともに守って行きたいものである。

（ささき　ひろあき・㈱グリーンシグマ）

自然の森・メルヘンの世界－カツラの生える森を訪ねて－

木々の色は新緑からだんだん濃い緑に変ってきています。足下は下草が覆い道が見えない地点がところどころあります。うっかりすると流水でえぐられた穴にあるいは泥濘に足をとられそうです。渓流を2・3ヵ所、じゃぶじゃぶ渡る度、ゴム長を履いた足にひんやり冷たさが伝わり、暑さをしのぐ快さを感じます。耳を澄ませば、水のせせらぎと鳥の声、今鳴いているのはオオルリとか、しばらくするとさっきと違う声も聞こえています。

少し段差のある沢伝いをさかのぼるとお目当てのカツラ林が開けました。相当な年輪を重ねたと思われる幾本もの巨木がしっかり地に根をおろし、枝は四方八方に拡がっています。その下は適宜に日差しを遮り、梢をわたる涼風が爽やかに体の中を通り抜けます。

カツラは真直に太く成長していくんじゃぁないことを知りました。絵本や童話の世界に出てくる森の精が宿る木とは、こんな立派な古木をいうのでしょうか。なにか包容力があり、たまに話しかけてくれるよう！素晴しいメルヘンの国に吸い込まれてしまいそうな自然の森に感動しました。

その傍で山の腹からゴウゴウと水が吹き出しています。これを「胴腹清水（どうばらしみず）」と呼んでいるんだそうです。自然の水、おいしい水、汗ばむ体に咽を潤す心地良さ。人手の入らぬ自然とはこんなにも心を和ませてくれるものなのですね。

これからも、そっとしておきたいこの自然。そう！森の精にお任せしておきたいと思いました。

（I.SA.）